



漁労具

青谷上寺地遺跡における漁法としては、「釣漁」「刺突漁」「網漁」「潜水漁」「ワナ漁」等が想定され、これらに対応する骨角製、木製、石製、鉄製の多様な漁具が出土しています。釣漁であれば釣針・錘、刺突漁であれば銚頭・ヤス先、網漁であれば網杵・錘といった道具立てです。

鹿角製のへらのような骨角器は、その大きさや形からみて、岩に貼り付いたアワビなどの貝をテコの原理で剥ぎ取る「アワビオコシ」として潜水漁で使えそうです。



結合式釣針（鹿角、猪の牙製）
と離頭銚頭（鹿角製）



アワビオコシ（鹿角製）



網の錘（石製）



結合式のヤス（中柄付き）

これほど多くの漁具が見つかった弥生時代の遺跡は、全国的にみても珍しいといえます。

これら漁具のうち、出土量が多いのは骨角製の銚頭・ヤス先、釣針です。銚頭やヤス先、結合式の釣針はその大きさから、マグロやサメ等の大型魚類やアシカ等の海獣類等、外洋性の獲物をとるためのものと考えられ、一方、潟湖（ラグーン）の小型魚の捕獲には網が多く使われたものと思われます。また、漁の対象となる獲物や漁場の環境などに合うように、漁具の形状や素材に改良を加えているようです。骨角製の銚頭は、青谷上寺地遺跡以外では見られない独特の形態（「上寺地型」と呼ばれています。）に加工しており、「アワビオコシ」と考えられる骨角器も、西北九州のものは鯨骨製であるのに対し、青谷上寺地遺跡では鹿角で作っています。

【ヤス先と銚頭】

柄に固定されたままのものをヤス先、柄から離れるものを銚頭として区別します。

銚頭にはソケット状の空洞が設けられており、ここに柄を差し込む構造で、銚頭と柄は紐で繋がっています。獲物を突いた後に銚頭と柄が離れ、銚頭が刺さったまま獲物を引き寄せることができます。